

甲藤好郎先生を偲んで

*In Memory of the Late Professor Yoshiro Katto*

増岡 隆士 (九州大学)

*Takashi MASUOKA (Kyushu University)*

甲藤先生が1月21日ご逝去になり、1ヶ月が過ぎました。今、教官室机の前に掛けております桜越しの富士山の絵を見ると、昭和39年に研究室で足柄峠から矢倉岳にかけてハイキングに出かけた折、眼前の富士山に見とれていた私に、登山帽姿の先生が「富士山をはじめて見たのか」とおっしゃられたことを懐かしく思い出し、先生の亡くなられた淋しさを思います。今日、大学近くのお寺の前を通るに、「大恩は知り(わかり)難い」といった言葉がありました。まさに学問上のことは言うに及ばずあらゆる面で先生から頂きましたご恩の大きさは私自身で感じる範囲をはるかに超えていることと思われま

す。先生は、昭和38年、航空技術研究所から東京大学教授に転任され、昭和39年4月、研究室を立ち上げられました。私は創設時の研究室に大学院学生として入れていただきましたが、その年の12月に先生のご著作「伝熱概論」が出版になりました。早速冬休みの帰省の折、持ち帰り、毎日が「伝熱概論」に暮れ、「伝熱概論」に明け、一頁一頁を理解したいと夢中の取り組みでした。研究面では当時、先生は観測窓を兼ねたプリズム干渉板による沸騰伝熱とバーンアウトに関してご研究になり、沸騰現象の観察と伝熱特性の変化を解析しておられました。無論、当時私にはその意味はまったくわかっておりませんでした。伝熱面近傍の現象で想像できないようなことが観察されることに驚いたものであります。

私には、多孔質内の自然対流に対して、当時、多孔質熱拡散率概念の拡張や境界層概念の導入などに懇切なご指導をくださいました。たいへん楽しい研究を行うことができましたのは先生とのめぐり合いとご指導によるものであります。またお蔭様で研究室同窓はもちろんのこと研究室を越えて、多くの方々との出会いを頂くことにもなりました。

ご講義でもそうでありましたが、現象を規定する

変数やパラメータの極限状況の本質の捉え方が示され、現象の理解の仕方、考え方、モデルのたて方が示され、そしてこれらこそ大事とされる先生に、大きく影響を受けているように思います。追悼のこの文章の中で触れるのも妙な気も致しますが、強制対流や自然対流の熱伝達に対して、プラントル数が無限大と零の極限の解釈と言いますか、とくに速度や温度のプロファイルの特徴的な設定しかたとそれに基づく現象の理解のしかたや先生の本質の捉え方にインパクトを受けました。私が講義を行う立場になりましたら、このような感動が多少とも伝えられるかどうかは課題でありました。

先生は、しかも研究の遂行には、広い視野や香り高い思想が付随するとお話になられました。研究室に在籍の間も、いろいろの所へお連れ頂き、学問のみならず多方面に広がりある経験をさせていただいたことを思います。またある日は、これとは次元が異なりますが、研究室のあまりに散らかっている状態に対し、「研究室は学問をするところだから、もう少しアカデミックな雰囲気にはできないか」とご注意を頂いたことも、なぜか研究姿勢と関係するように心に残っております。その高みや深さに到底理解は及びませんが、高い精神と哲学、厳しい学問への愛、慈愛に満ちた先生を思います。

ご葬儀は、先生のお人柄を偲びいろいろのご縁の方々のご参列され、そしてご関係されておられた多くの学会や国内外からの弔意が多数寄せられて、中野の宝仙寺にてしめやかに行われました。奥様のご挨拶の中に、先生との温かきご家庭のご様子も伺えました。公私共に充実されたご生涯であられたことを思います。先生に長い間ご指導を頂きましたことに研究室同窓生とともに心より感謝を申し上げます。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。